

空襲下

九十日間の教育召集から除隊して、東京に戻り、陸軍技術本部に入所した。翌昭和十七年、帝都防衛隊に召集され、二週間程、教育を受けて、帝都の治安を守るため、警戒警報のサイレンが鳴ると、職場から、任務地に召集される仕組になっていた。

昭和二十年三月十日、戦争は敗戦色が濃くなり、東京・荒川区の上空にB29の大編隊が焼夷弾の雨を降らせた。その日は陸軍記念日で、多分攻撃を受けるのではないかと、上層部から訓示があった。私事では、三月七日実兄が病で死亡したので、中隊長に申し出たが、軍務中の理由から、葬儀には妻が出席することとなり、手配したが、切符が買えず、三月九日夜ようやく、故郷・新潟に出発した。

九日夜九時頃、警報がなり、召集任務地は、はけた 峡田第九小学校であった。灯火管制で街は暗く、不気味な時がしばらく流れた。

これまで空襲といっても、敵機が二、三機で焼夷弾の焼打作戦を行い、神田辺りで三十軒位、火災状態になったと聞いていた。偵察機が高度で西から東に抜ける状態が三ヶ月位毎夜続いていた。初めのうちは空襲警報が鳴ったが、なれて警戒警報となった。

今夜は、上野辺りの高射砲が何回かさく裂し、よう撃作戦が展開されたが、いつものように鎮静状態に戻るのかと思っていたら、方々から、火災が発生した。戦争が激しくなり、学童や相当数の家が疎開して留守家となり、焼夷弾が落ちても家に入れず、大火災の原因となってしまう。見る見る火災が増え、小隊長命令で、一つの道路を境に類焼を防ぐため、兵隊が十数軒の屋根に上り、瓦を道路に投げた。そのため類焼は食い止めた。

B29は焼夷弾は落下するが、爆弾や機銃掃射はしない。我々は消火と老人・子どもを避難させることが、任務となった。その頃防空ごうにいた人も出てきた。夜中というのに、空は明るく、まだ焼けない家でも、重要なものを持って避難した。我々も手の施しようがなく、空を見上げると煙に反射して赤い敵機が時々見える。こちらも平気になって、道案内やら、慰めの言葉をかけ、どちらかと言うと、ぼう然と立っていた。防空ずきんをかぶり、子連れの人、病の老人を背負った男、だいはちぐるま 大八車に布団と子どもを乗せてゆく人、これからどうなるのか分らない。

先程、食い止めたはずの家並に風向きが変わって、結局焼失してしまった。どの位過ぎたか、警報解除となり、何百軒か焼け、そのまま燃えるだけ燃えてしまった。その他に類焼しないよう努力して、夜明けを待つ。街毎に警防団が組織されていたが、広範囲になっては各自の家も守り得ず消火は出来ないままである。

翌十一日になって、噂を聞いて驚いた。荒川区はもとより、下谷・浅草・本所・

深川とで、十数万人の犠牲者が出たとか。国家統制下で、報道はゆがめられ、物資は極度にひっ迫し、新聞は今の二頁分しかない。結局、新聞も見ず噂だけであった。

すっかり鎮火して、我が住居の安否を確かめるため外出が許可された。恐る恐る帰って見ると、二人共出た後で、すっかり焼け何もない。道の反対側のそば屋の二階に寝起きた人に聞いたら、焼夷弾が二発も落ち、他の家にも落ちたので仕方がなかったと言われた。留守ではなおの事、強がり「これで一人前になった」と人さまには言いましたが、記録のノート・写真・家具・食料、家は借家でしたが、本当に残念だった。私共は若かったもので、その後何とか立ち直ったが、高齢者は氣力を失ってしまった。隣組の人は、ばらばらになり、行く先のない人は、そば屋にしばらくいたが、次の空襲でここも焼かれた。区役所から、羅災証明書と衣料切符をもらったが、品物がなく、買わないうちに、転居先の滝野川区で、四月十二日また焼かれた。故郷や知人から、見舞いに頂いた衣類も灰になり、着のみ着のままで、羅災証明書をもらった。渋谷区に移転して、五月二十四日空襲でまたまた羅災証明書をもらい、職場の幹旋で寮に一人で入った。妻は帰る所を失い、終戦後まで新潟に居続けるはめになった。

十二日本所の知人を訪ねたが、焼け跡の燃え残り板に行先が書いてあり、人に訪ねたらこの辺りも多勢焼死したと話された。三輪と浅草の間の電車は何台も焼け崩れて、道の中央に残っている。浅草では、今、軍隊が死体を運んで行ったと、人が説明してくれた。焼け野原に学校の防火壁が残り、場所によっては建物に、または棒が立っているように見えた。焼け跡に、行先のない人は焼けトタンを集めて寝起きしている。水道の蛇口のきく所で、飲食にしたり洗い物をして、所々に人が住んでいた。羅災者のいる学校を訪ねたら板の間に一枚毛布で過しており、女性は髪がぼうぼうで哀れであった、

※ この体験記は、上尾市発行「私の戦争体験」（昭和五十八年）に掲載されたものを、原文のまま再掲したものです。